

馬鹿者を命す!

第五回 麻衣VS薫子 渋谷和宏

イラスト ● 丹下京子

前回までのあらすじ

広岡から町おこしのヒントとなる「森の多角経営」について聞いた悠太。企画書を書こうと事務所兼社宅のドアを開けようとしたとき、例の紙切れを見つけてしまう。同時に、麻衣から「伊予南駅にいる」という知らせが……。

大渡薫子 (おおわたり・かおるこ)
21歳、大渡晴美の娘、京大阪大学で建築を学ぶ。

喜多嶋翔 (きたじま・しょう)
25歳、西朱雀プロジェクト社員、悠太の1年先輩。

青山麻衣 (あおやま・まい)
24歳、悠太の元カノ。就職した大手有名ネット通販会社の先輩から交際を申し込まれ、悠太をふるのだが……。

登場人物

石打悠太 (いしうち・ゆうた)
25歳、主人公、商店街の再生や町おこしプロジェクトを手がける大学発のベンチャー企業、西朱雀プロジェクトの若手社員で入社2年目。四国・伊予南市に赴任する。

四分地恒三 (しぶち・こうぞう)
59歳、天興大学地域デザイン学部教授で西朱雀プロジェクト社長。

新庄誠人 (しんじょう・まこと)
39歳、伊予南市役所・地域振興課長。

大渡晴美 (おおわたり・はるみ)
45歳、伊予南市長。

「今、伊予南駅なの？」

二つの言葉が胸に突き刺さり、悠太はその場に立ちすくんだが、何とか気を取り直して車に戻った。時刻は午後七時前だ。新庄はきつとまだ職場にいるに違いない。

市役所二階の地域振興課のデスクで、新庄は一昨日と同じようにパソコンに向かっていた。

「こんな時間にどうしました？ 何だか顔色が悪いですよ」

悠太は何者かが置いていった紙切れを新庄に渡した。

「書き置きを見つけたのはこれで二度目なんです。新庄さん、誰か僕たちに悪意を持っている人とか心当たりないですか」

書かれた文字に目を落とした新庄は一瞬表情を曇らせたが、すぐにいつものポーカーフエイスに戻った。

「残念ですが見当が付きませんね」
新庄は紙切れを悠太に返した。

「石打くん、この書き置き以外に何か嫌がらせをされましたか」

「いえ……」

「だとすると、あまり気にしなくてもいいかもしれませんよ。もし相手が本気であれば追い出してやりたいのなら、車のタイヤをパンクさせるとか、やり口はいくらでもあるはずですよ」

「そうですねか」

「新庄さん……本当に見当がつかないんですか」

「もちろんですよ。あなた、なぜそんなことを？」

「新庄さんを見ていると何だか心当たりがあるような感じがするんです」

新庄は苦笑した。

「あなたの気のせいですよ。話はそれだけです。もしかして企画書できましたか。まだならそろそろタイムリミットが……」

「もう一つあるんです」

悠太は新庄をさえぎり、一步、にじり寄った。

「年付き合っている彼女がいて、同棲しているって」

「それって、ひどくない？ 彼女がいながら……」

「でも『別れる』って」

麻衣は悠太の顔を覗き込んだ。

「悠太、教えて？ 男がそう言う時って信じたいの？」

「僕には何も言えないよ」

た。

「実は折り入ってお願いしたいことがあるんです。明日の午後、もし空いていたら、僕の知り合いを伊予南市内の観光スポットとか、とっておきの場所に案内していただきたいんです。身勝手なお願いだとはわかっていますが、でも、お願いします。お礼もします。このとおりです！」

「ほお」
新庄の苦笑いが薄笑いに変わった。

「お礼までと言うのは何だかわけありませんね。私、どうせ土、日はいつも暇なので、事と次第によっては引き受けてあげてもいいですが、それにはまず事情を説明してもらわないとね。知り合いとはどんな知り合いですか」

「それは……元カノです。出張で大阪まで来たのでついでに寄りたいと言っんです。でも僕は案内できません。だって……企画書を書かなければいけませんから」

「ほお、それはそれは良い心がけですね」
新庄の薄笑いが不気味さを増した。

新庄のもとを辞した悠太は伊予南駅へと車を走らせた。

麻衣は伊予南駅前のベンチに座り、スマホをいじっていた。ほんの少し脱色したショー・トカットが軽快なベージュのパンツスーツによく似合っている。

麻衣は車を降りた悠太に気づき、にっこり笑って立ち上がった。その笑顔を見て悠太は

胸を締め付けられた。ほんの少し前までは麻衣の笑顔は自分だけのものだったのだ。

「車、買ったの？」

麻衣がバツソを指さした。

「買ったけれど、これはレンタカーだよ。納車まであと四五日かかるんだ」

麻衣は手にしていた買い物袋を差し出した。

「梅田で買ったの。いろんなたこ焼きが入ったバラエティーセット、悠太、粉もの好きだったよね。社宅にビールはある？」

「途中で買っていくよ」

「四国で酒盛りだなんて嘘みたいだね」

麻衣が楽しそうに話していたのは興味深げに事務所兼社宅の中を見て回り、たこ焼きをつまみにビールを飲み始めるまでだった。

酔いが回るにつれてだんだんと口数が減っていき、やがて悠太の話を上の空で聞き流すようになり、とつと唇を硬く閉ざしてしま

った。

悠太はしばらくの間、麻衣の沈黙に付き合

ったが耐えられなくなって聞いた。

「話があると聞いていたよ」

麻衣がコクリとつぶやく。

「彼のことなの」
「何となくそうだろうなと思ってたよ。職場の先輩だったよね。何があったの？」
「彼、彼女がいたの。一緒に住んでいたの」
「それ、過去形？ それとも」
「現在進行形、彼のケータイに電話したら女の子が出て、それで彼に聞いたしたら、四

